

異儀之條不可然候所詮於向後不可有其煩之旨所々江堅可被相觸之由候恐々謹言

六月三〇寶徳年 廿一日

政元 在判

高俊 在判

矢部遠江守殿

〔教令類纂 九十七〕寛永二乙丑年八月廿七日

定

一往還之輩番所之前ニ而笠頭巾ヲぬがせ相通べき事、

一乗物ニて通候者乗物之戸をひらかせ相通すべし、女乗物ハ女ニ見せ通すべき事、

一公家御門跡其外大名衆前廉より其沙汰可有之候、改るニ及べからず、但不審之事あらば格別

たるべき事、

右此旨ヲ相守るべき者也、仍而執達如件、

寛永二年八月廿七日

奉行

寛永十五戊寅年

京都又者從江戸、以人馬御朱印急相通輩者不及沙汰、大坂御定番衆兩町奉行證文次第急可相通、子細於載文言者夜中可被通之、其外所々守護人所之奉行人慥成證文有之者不寄夜中可通之候、注進之旨趣於分明者、穿鑿之上可被通之候、此外夜中一切不可通之もの也、

月日

美濃

豊後

三宅半七郎殿

土屋忠次郎殿